

P2-048

プレイリーダーによる在宅療養のこどもへの遊び支援活動

荻須 洋子、香月 雅子、本田 睦子

認定NPO法人難病のこども支援全国ネットワーク

【目的】

子どもは遊びを通して、友達や社会と関わり成長発達する。病気の子どもにとっても遊びは、子どもらしい体験の時間として重要である。そこで、難病ネットでは、子どもの心理や発達について基本的な知識を持つボランティア=プレイリーダーを養成し、病院に派遣することによって、入院を余儀なくされている子どもに、豊かな遊びを提供し、心身ともに健全な成長発達を促している。平成27年1月より、小児慢性特定疾病児童等自立支援事業が始まり、難病ネットでは東京都の委託事業として、遊びのボランティアの派遣を開始した。まだ2年目の活動であるが、在宅療養やレスパイト入院時の遊び支援活動の実態と意義、また今後の課題について昨年に引き続き検討する。

【対象と方法】

東京都に在住の小児慢性特定疾病対象者は約7000名である。この対象者に東京都福祉保健局によるリーフレットを作成し、その中に遊びのボランティア(プレイリーダーの派遣)の紹介を入れた。派遣事業が平成27年秋より開始された。事業開始にあたって、派遣事業の趣旨に賛同して参加するプレイリーダーを募集した。現在32名が登録して、活動にあっている。遊びのボランティアを希望する家族とボランティアのマッチング、在宅訪問にあたっての諸注意、遊びの方法など整えなくてはならないことがまだまだ多くあり、試行錯誤の日々ではあるが、実際の訪問活動を多数行うことで、実績を積み、より良い事業になるよう努めている。その遊びのボランティアの1年の事業内容の統計、利用者の感想などを振り返ることとする。

【結果・考察】

2年目の事業ではあるが、週3回程度と訪問回数も増え、訪問先の子どもたちにも家族の方々にも喜んでいただいている。在宅療養の子どもたちは療養生活も長期にわたるので、遊び環境にも恵まれないが、遊びのボランティアが訪問することで、子どもたちの健全育成の一助となり、病気や治療の不安を軽減し、日々の生活が楽しくなるように活動をしていきたい。プレイリーダーについては、これまで以上に研修内容を充実させ、新規プレイリーダーの養成事業にも、自立支援事業の内容を組み込んでいる。

P2-049

小児訪問看護推進を目的とした多職種連携研修会の実施と評価

西村 あをい

東京情報大学 看護学部

【目的】

医療的ケアを継続しながら在宅療養する小児が地域で増加する昨今、小児の訪問看護への期待は益々大きくなっている。しかし、全国にある訪問看護ステーションの中で、小児の訪問看護を実施している事業所は1～2割と言われ、東京都江東区内でも小児に対応出来る訪問看護ステーションは少ない。そこで江東区医師会訪問看護ステーションが中心となり、小児訪問看護推進のための多職種合同研修会を実施したので、その取り組みについて報告する。

【方法】

平成28年5月～平成29年2月、城東4区(江東区、墨田区、江戸川区、中央区)に勤務する介護事業所職員を対象にして、小児訪問看護に関係する研修会を開催し、最後に無記名アンケートを実施しその内容を分析した。

【結果】

実施した研修会は8回、テーマは「小児訪問看護の基礎知識」「小児の人工呼吸器の仕組みと取り扱い」「小児在宅医療で利用可能な社会資源の実際」「小児訪問看護と介護の連携」「小児のスキントラブルとスキンケア」「小児の訪問リハビリ」「在宅療養児のレスパイトケア」「在宅療養児の家族支援」で、研修講師は城東4区内に勤務する専門職スタッフである。毎回の参加者数は平均46人、職種は訪問看護師が最も多く、次いでリハビリ職、ヘルパー等の介護職、相談支援員等の福祉職、特別支援学校教員等の教育職等であった。研修会参加の満足度は90%以上、その評価は「小児訪問看護に関する知識が深まった」「多職種合同研修会の意義を感じた」「利用者家族の声を聴く重要性を感じた」「研修会参加以降、小児の訪問看護依頼を受けることになった」「研修会開催を継続して欲しい」等の意見があった。

【考察】

研修会開催当初は参加人数も20名弱と少なく、また職種は訪問看護師がほとんどであったが、多職種連携の研修会であることのメリットが理解されたためか、参加人数も増えて様々な職種の方が関心を示す様になって来た。また小児の訪問看護や訪問介護に新たに取り組む事業所も徐々にではあるが増加しつつある。次年度は参加者のニーズを取り入れながら小児看護特有の看護技術や事例検討などの研修会も実施していきたい。